

HELLO

ハローインタビュー

シンガポールダンスシアター (SDT) バレエダンサー

なかはまあきら

あげつまさとる

中濱瑛さん、上妻悟さん

バレエとは、どの国の人にも伝えることのできる言葉の
いらない表現手段であり、
生きる希望でもあります。

シンガポールダンスシアター (SDT) でバレエ
ダンサーとしてご活躍中の中濱瑛 (なかはまあきら)
さんと上妻悟 (あげつまさとる) さんのお二方
に、バレエ芸術についてお話を伺いました。

聞き手

シンガポール日本人学校中学部 山田祐史教諭、三富涼花教諭

ーバレエを始めたきっかけについて教えてください。

中濱さん (以下、敬称略) 私は3歳の時にバレエを始めたのですが、母にバレエ教室に連れて行ってもらったことがきっかけです。絵画、ピアノ、水泳など色々なものを見学しに行ったのですが、3歳ながらにバレエをやりたいと自分で言ったそうです。

上妻さん (以下、敬称略) 僕は小さい時に劇団四季の『ライオン・キング』を鑑賞し、ミュージカル俳優に憧れたことがきっかけです。幼いながらに「僕、これやる!」と言ったそうです。ですから、最初はミュージカル俳優として劇団四季に入りたいと思っていました。劇団四季の俳優はバレエ経験者が多いことを知り、小学校に入ってバレエをやると自分で決め、バレエを習い始めました。

中濱 私も小学校の頃に、当時ロシアから来日していたバレエ団の『くるみ割り人形』を観に行きました。その時、これからは観る側ではなく、表現する側になりたいと思って、バレエダンサーを目指しました。

ー何故、シンガポールダンスシアター (以下、SDT) に入ったのですか？

中濱 カナダのバレエスクールを卒業したあと、一年だけアメリカのワシントン・スクール・オブ・バレエというところにいたのですが、当時の校長先生がたまたまシンガポール人で、その方を通じてこのSDTを紹介してもらいました。ここはそんなに大きいバレエ団ではないですが、バレエのレパートリーが豊富であることに魅力を感じ、入団しました。

上妻 僕はオーストラリアにいる時に出会ったダンサーと一緒に応募を決めました。決め手になったのは、やはり中濱さんも言ったよう



(左から) 上妻悟さん、中濱瑛さん

に、ここの団ではクラシック (古典作品) もコンテンポラリー (現代作品) も両方扱うところが良いなと思いました。大きい団だと、どちらかに偏ることがありますが、小さい団だからこそ多様なバレエを表現できるところが魅力的だと思います。

ー今のお話と通じるところもあると思いますが、他の団にはないSDTの良さについてお聞かせください。

上妻 様々なタイプのダンサーがいるところが良いと思います。クラシックの型にきちっとはまる人もいれば、その人にしかできない動きを持っているダンサーもいます。オーディションなどでは似たようなタイプのダンサーを集めることも多いのですが、ここではどのジャンルにもはまるような人がいるので、そこが他にはない独特な良さだと思います。

中濱 その通りですね。また、ダンサー同士の年齢が近い分、助け合い、教え合いができることも魅力的だと思います。私たちは平均年齢が25歳くらいで、若い人が多いのも特徴です。他の団はベテランの先輩がいて気を使うこともあるかもしれませんが、私たちは友達感覚で気を使わずに高め合っていくことができていると思います。

ーバレエの魅力について教えてください。

中濱 バレエは、言葉を発しない舞台芸術です。言葉の分からない人でも、お子さんでも、お年寄りでも、みんな平等に楽しめるのが良いと思います。

上妻 作品にもよりますが、バレエというのは、まず過去に作られたバレエという芸術があり、ストーリーがあり、舞台、照明、全幕公演の場合は生のオーケストラの音楽もつきます。そういうあらゆるアートフォームが一体化して創り出されるのが僕たちの作品です。また、バレエという芸術もすぐにできるものではなく、バレエ団が存在するように、ダンサーたちの長年のトレーニングが必要です。そういう色々な芸術の形やダンサーたちの努力の蓄積が一つになる瞬間が本番の舞台であり、そこにバレエの魅力があると思います。

ー今までに挫折した経験はありますか？

中濱 カナダのバレエ団に5年間在籍していて卒業する時、バレエの先生に「プロになるのは難しいと思うよ」と言われたことがあり、それは挫折というよりショックでした。帰国して日本の大学に行こうかとも思いましたが、やはり悔しく、諦めきれないという思いが勝り、やはり「私はバレエが好きだ!」と再認識しました。そして、見返してやろうという思いで、その後1年間アメリカで研修生としてバレエスクールに通い、絶対にプロになるということだけを目標にしました。

上妻 今まであまり大きな挫折はないと思います。ただ、これだけは嫌だな、悔しいなと思った瞬間はあります。一つは、本番で自分の思った通りにいかない時。もう一つは、自分ができないがために全体の振付が変わる時です。特に新しい作品で新しい振付を作っていく時に自分のせいで変更があると、実力がないと突きつけられたようで、悔しく、落ち込む時があります。

中濱 それは自分にも経験があり、とてもよく分かります。構造的にその振付ができないこともあるのですが、自分のテクニックの問題

で振付が簡単なものになってしまうこともあるので、それは非常に悔しいですね。

上妻 はい。回数や経験を重ねるにつれ、コツがつかめてきたり、自分の考え方を変えたりすることはできるのですが、それができない時に、変更を命じられると悔しい。そうならないようにしたいという気持ちモチベーションになっていると思います。

一逆に今までやってきて良かったと思えた成功体験はありますか？

中濱 私は一昨年、『眠れる森の美女』のオーロラ姫という役を頂いたことが嬉しかったです。その時は、今まで頑張ってきて本当に良かったと思いました。実はバレエ団にいる頃、初めてプロの舞台に子役で出させて頂いたのがこの作品でした。そこから主役になることができて、まさか自分がやれるとは思っていなかったのが、夢のようでした。思い出がある作品なので、さらに嬉しかったです。

上妻 僕は、自分に関しての成功体験はあまりない気がします。毎回、ここがダメだったなという反省点ばかりなので。ただ、自分が今までやってきたことややりたいことが舞台上で発揮できているのは嬉しいです。また、本番の時、袖や舞台の後ろから見る瞬間も好きですね。例えば、他のダンサーたちが練習でできなかったことが本番でできているのを目の当たりにすると、自分のことのように嬉しくなります。自分のことだと、トータルで考えるとうまくいかなかったなと思うことが多いですね。

一本番で全部うまくいくことはないのですか？

上妻 100点の舞台ということはないですね。平均点として良かった舞台はありますが。満足感があり、やりきったという感覚はある時はありますが、全部満点で終わられることはないですね。

中濱 全部満点でうまくいったら辞めてもいいと思いますね。(笑)

一ストイックですね。一回一回反省をされるのですか？

中濱 公演が終わったら、反省をして自分の踊りを振り返ります。ただ、本番中にミスをしたとしても、その時は高度な集中力を保たなければならず、お客様には分からないようなミスでも、絶対に引きずってはいけなと思っています。うまく切り替えて、また次の踊りに集中します。

一バレエダンサーとして常に意識していることはありますか？

中濱 できるだけ常に万全のコンディションで公演に臨めるようには意識しています。例えば、もし自分に悲しいことや辛いことがあっても、それはお客様は知らないし、お客様はチケットを買ってただ公演を楽しみに来てくれているので、正直ダンサーの私たちがどういうコンディションでいるかなど関係ありません。お客様にとってはそれが一回きりの舞台で、もしかしたらその人は一生バレエを観に来ないかもしれないし、そう考えると、一回一回の舞台を大切に、今自分ができる最高のパフォーマンスをお届けしたいなと思っています。

上妻 僕たちは毎朝、「クラス」という基礎レッスンをしています。僕の場合、その「クラス」で、その日どんなに疲れていても、「プッシュ」といって自分の体を追い込むことを欠かさずに行っています。自分がやりたくないと思うことでも向き合うようにしています。毎朝のこの鍛錬は、本番の舞台でも役立ちます。体が負けると、全てが台無しになるので、基礎の体作りはとても大切にしています。

一今は主にどのようなことをされているのか教えてください。

上妻 今は3月上旬に控える舞台『ロミオとジュリエット』のリハーサルをしています。また、1年の中でシーズンごとに6つの公演があり、ツアーなどに行くこともあります。基本的にコンテンポラリー(現代作品)とクラシック(古典作品)を交互に上演しているので、そのための練習をしているという感じです。

中濱 そうですね。今は月曜日から金曜日まで毎日リハーサルで、公演があるときは一週間続けて仕事をすることもありますが。劇場に入ると、夜が遅いので忙しくなります。



中濱瑛さん



上妻悟さん



一もしも、風邪を引いた時はどうされるのですか？

中濱 公演が間近に迫っていない時期なら休むこともできるのですが、もし本番直前や本番の際に風邪を引いてしまったら、基本的にどの役にも「アンダースタディー」といって代役がついているのでその人が代わりに出ます。ダンサーは練習中や舞台上で接触して怪我をすることもありますし、トラブルやアクシデントはつきものです。

一中濱さんと上妻さんはどのようなバレエを目指していますか？

中濱 私は、公演が終わった後、お客様に「あの時の公演は良かったな」「心動かされたな」「嬉しい気持ちになったな」など、後から思い出してもらえそうなバレエを目指したいという思いがあります。

上妻 僕は、ごまかさずに、本当の実力が舞台上で見えるようなバレエを目指したいと思っています。何事もそうだと思いますが、何かを極める時には、ピラミッドを支える土台のように時間をかけて作り上げる地味な基礎づくりが必要だと思います。そこから少しずつ積み上げていくことで、一番上にテクニックや感情の表現が初めて積み重なると 생각합니다。誰もその一番上のテクニックや感情表現を求めがちですが、そうではなくて、下からきちんと積み上げているような見えない基盤をしっかりと持つバレエダンサーになりたいですね。そういう人は、舞台上で見えても強いし、それが最終的にその人の本当の実力になると思います。それを舞台上で見せられるバレエを目指したいと思っています。

一バレエはご自分にとってどんな存在ですか？

中濱 私にとってバレエはなくてはならない存在です。バレエがない生活は想像できません。小さい時から、色んなものを犠牲にしてきたねとよく言われますが、自分ではこれができなかった、辛くて何かを犠牲にしてきたという感覚はなくて、プロになるためには普通の学生



生活ができないことは当たり前だと思っていました。そう思わせてくれるバレエに小さい時に出会えたことは本当に幸せなことだと思っています。

上妻 僕にとってバレエは好きだからこそ真剣に向き合いたい存在です。演技はごまかそうと思えば多少ごまかせるところもあるかもしれませんが、しかし、そうではなくて、僕は0か100かという性格なので、70の妥協点を見つけないで、どんなに時間がかかっても100の力が出せるように真剣に向き合いたいと思っています。

ーバレエを踊ることで、周りにどのような影響を与えたいですか？

中濱 SDTでも世界のどのバレエ団でもそうだと思いますが、みんな違う言語を話し、人種や出身も違うし、宗教や肌の色も違う中で、みんなバレエを極めようとしている気持ちは一緒です。私達は、形も正解も分からない美の芸術を追求していて、それに向かってみんな努力をしているので、この姿を見てもらって少しでも子どもやお客様に影響を与えることができれば嬉しいなと思います。

上妻 バレエを観に来てくれるというのは、チケットを買って劇場に足を運んでくださるということです。例えば、これは劇場に映画を見に行くことと似ていますが、映画は事前に編集をすることができます。一方、バレエは僕たちが時間をかけてやってきたものです。私達生身の人間がその時に集中して、全てをかけてやっているものなので、その思いや気持ちはどの人達にも絶対に伝わっていると思っています。バレエを見たことのある人も無い人も、バレエを通して感受性を豊かにしていただけたら嬉しいです。

ーバレエの魅力を伝えるために、今後はどのようなことに挑戦していきたいですか？

中濱 今はSNSなどインターネットで情報を広げられると思いますが、今からバレエをやろうと思っている人やプロを目指している子どもに、例えば「細くないとバレエダンサーになれない」といったような誤った情報が広まっていることも多いので、プロとしても教える側としても正しい知識を広めていけたらいいなと思っています。イギリスのジョージ王子がバレエを習っていることに対して、アメリカのニュースで面白可笑しく取り上げていたことがありますが、バレエは女子が行うものだという偏見もなくなりたいと思っています。このようなことは、私達プロしか出来ないことだと思います。

上妻 僕は、リピーターを増やすことが理想だと思っています。お客様がバレエの魅力を感じてくれたら、もう一度見に来てくれると思います。また、自分がやったことのない動きや振り付けをすれば、僕自身もより真剣になれるし、それがお客さんにも伝わるのではないのでしょうか。そして、お客さんにとって見たことのない新しい作品が増えれば、次に何をやるのか気になって再び会場に足を運んでくれるのではないかと思います。

ーバレエを通して、これからどのような人生を歩んでいきたいですか？

中濱 私の今までの人生はバレエのおかげで豊かになっているので、現役を辞めて見る側・教える側になった時にバレエの魅力を伝え、バレエに恩返しをしていきたいですね。私は、バレエによって努力や礼儀を覚えることが出来たし、努力を惜しまずに取り組めば結果はついてくると実感しているので、これらのことを伝えていきたいです。

上妻 僕は、バレエを通して新しい国に行くことも出来たし、新しい役や動きなどたくさんの新しいことに挑戦することができました。現役を続けていく上で、バレエダンサーは体力的に限界がくるのでずっと踊り続けることは出来ません。今後のことはまだ分かりませんが、僕は知らないことを知るのが好きなので、バレエ以外のことにも挑戦していきたいと思います。例えば、バイオリンが弾けたらカッコいいと思うので、バイオリンをやってみたいなとも思っています。(笑)

ー最後に、バレエを通して私達に伝えたいメッセージをお聞かせください。

中濱 私達の公演を見に来てくださって、踊りを見て、お客様一人一人の中で何かしらの感情が生まれたら、それだけで私達は幸せです。それが感動なら嬉しいことですが、例えば、それがつまらなかった、嫌だったという感情だったとしても、少しでも何かを感じ取ってもらえて少しでも現実逃避のお手伝いができ、私達が役に立てれば嬉しいなと思っています。バレエを見に来てくれる方の中には、非現実を体感したいから観に来てくれる方、日常生活で得られない何かを求めて見に来てくれている方もいるので、私達の踊りや仕草を見て、少しでも心が動くような体験をしてもらえたらと思います。

上妻 僕は、好きなことを極めるために、今までバレエを続けてきました。この道に間違いはなかったのだから、周りから何を言われても自分の好きなことを信じてやり続けることは正しいと思っています。この経験から、好きなことを追い求める気持ちを忘れずに行動することは正しいことだと伝えたいです。

ーありがとうございました。

インタビュー後談

終始、和やかな雰囲気のもと行われたこのインタビューで、多くのことを教えてもらいました。同じ世代だからこそ、心を打つものもありました。お二人と話をしていて一番感じたのは、プロとしての覚悟と根性、そして謙虚さです。誰にも見えないところでずっと並大抵でない努力を積み重ねているからこそ、紡がれる言葉の数々がありました。柔らかく穏やかな笑顔の裏に、プロとして生きると決めた簡単には屈しない力強い意志と気概を感じました。素晴らしいご経歴をお持ちでも、常に低姿勢で礼儀正しいお二人に出会えて光栄であるとともに、ご多忙なスケジュールの中このようなインタビューに快く応じてくださったことに感謝いたします。お二人が仰っていた言葉をお借りすれば、このインタビュー記事を読んで頂くことで、バレエ芸術の魅力、そして好きなことを仕事にする面白さについて、読者の皆様にも少しでも伝われば幸いです。中濱さん、上妻さん、そしてこのような機会を設けてくださったヤングご夫妻、素晴らしいお時間を本当にありがとうございました。

文責・写真：広報部編集委員 山田祐史教諭、三富涼花教諭
画像提供：中濱瑛・上妻悟、三浦文明(シンガポール・ダンスシアター)